

〔翻訳〕

ザストロツィーロマンス (5)

パーシー・ビッシュ・シェリー 著
治村輝夫 訳

第十章

計画の遂行がたゆまず続く間、時間はマチルダにとってゆっくりと過ぎていった。というのも、ヴェレツィの体は日々さらに衰弱して、不安に脅える彼女は、死に近づいている兆候だと想像したから。——ヴェレツィにとってゆっくりだったのは、この世では惨めでしかないで死の訪れを待ち望んでいたからだ。

マチルダの心の中の葛藤を数え上げても無駄であろう。それは数多くあって次第に激しさを増していた、と言えば十分である。

ヴェレツィの病状はやがてとても危険な様相を呈したので、マチルダは驚いて医者を呼びにやった。

以前にヴェレツィを診療した心のやさしい医者は不在であったが、医術に熟練した一人がやって来て、温暖な気候のみがヴェレツィの健康を回復させるだろうと言った。

マチルダは彼に、ヴェネチアの領地に彼女が所有している人目につかない、美しい場所に転居することを申し出た。ヴェレツィは、死が間もなく到来すると予想し、どこで死のうと重要ではないと考えていたので、同意した。それに本当のところ、彼は拒否することでマチルダのように親切な人を苦しめなくなかった。

旅は次の朝と決められた。

朝がやって来た。ヴェレツィはまだ極めて弱く、やつれていたの、馬車に運び入れられた。

旅の途中、マチルダはあらゆる世話とやさしい親身になったあらゆる気遣いで、ヴェレツィの憂鬱を追い払おうとした。彼の精神にのし掛かっている重荷を取り除くことができれば、彼はすみやかに健康を取り戻すだろうと思っていた。いや、とんでもない！ それは不可能だった。彼はマチルダの気遣いに感謝していたけれども、なおいっそう濃い憂鬱の影が顔一面に広がっていた。もっと痛切な狂気と憂鬱が彼の生命力を奪っていた。彼は昔のもの——昔なら自分の興味を強く引いたであろうと思われるもの——を自分がまったく嫌悪するようになっていることに気付いていた。アルプスのぞっとするような雄大さ、その麓で泡を立てて勢いよく落ちる瀑布は、それらが以前には常に抱かせた畏怖の念を起さなくなっていた。

高い松の茂みが憂鬱をさらに増すことはなかったし、ピエモンテの花咲く谷間も、香りで空気を芳しくしているオレンジ園も、鈍感になった彼の魂を喜ばすことがなかった。

ふたりは旅を続けた——間もなくヴェネチアの領地に入った。そこの薄暗い、辺鄙な所にラウレンティーニ館が立っていた。

館は暗い森林の中にあった——周囲の高い山々は、ゴツゴツした岩の頂上を空に向けてそ

びえ立たせていた。

山々は中腹まで古代の松とすずかけの木の衣をまとっていて、巨大な枝が遠くまで延びていた。上方はむき出しの花崗岩（その上に、傷ついたカラマツが時たま見えることがあるかもしれない）がその巨大で不格好な体を起こしていた。

これらの山々によってできた円形競技場の中央に、森に囲まれてラウレンティーニ館が立っていた。その灰色の小塔と古ぼけて傷んだ胸壁が森林の巨木よりも高くそびえていた。

この薄暗い邸宅の中に、ヴェレツィはマチルダに案内された。彼の感じる唯一の感情は、自分が長く生き延びているのに驚いたことだった。マチルダと召使に支えられて彼が館の中へと進んで行く時、一つの思いに没頭したマチルダの魂はそれ自体の抑えきれない情熱によって混乱し、あの陶然とした、あの静かで澄みきった喜び（無垢な者だけが経験し、私たちが幼児期を過ごした場所に戻った時に生まれるような喜び）を感じなかった。

そう——彼女はこの喜びを感じなかった。この人里離れた館に戻ったことで得られた唯一の喜ばしい感情は、世の中の喧騒とそれとの接触から切り離されているので、自分が死に物狂いで計画した企ての遂行を邪魔されることが少ないかもしれない、という希望だった。

ヴェレツィの憂鬱は旅によって減じたというよりはむしろ増したようであったが、それでも彼の健康は、空気が次第に良くなったのと景色の変化によって、目に見えて改善した。こういった変化は、この上なく深く根ざした悲しみを時には一時的に軽減することがあるのだ。それでもまた、固定した場所では——孤独とさいなみ続ける自分自身の回想の中に再び取り残されると、ヴェレツィの心は自分が失った、

自分がいまだに崇拜しているユリアに立ち返った。彼は絶えず彼女のことを思った。彼は無意識に彼女のことを話した。そして、時にはうっとりと言葉を口にしてマチルダを絶望に追いやりそうになった。

数日がこのようにして過ぎ去った。マチルダの情熱は、時によって和らげられ、さまざまな事柄によって気が紛れてその激しさを緩めていたが、今やせき止められた川の流れのようにどっと溢れ出した。

しかしある夕方、ヴェレツィがユリアの思い出に対して永遠の忠誠をやさしい口調で明言するのを聞いて彼女は逆上し、頭は今にも動転しそうだった。

彼女のひどく乱れた魂は相争う感情にかき乱されて、目から光を放した。絶望的な愛に我を忘れて、極度に激しい自分の気持ちを覆い隠すことができず、彼女はヴェレツィを残して部屋から飛び出すと、感情を静めてよりよい復讐計画を考案するため、供を連れずに森林の中へさまよい歩いて行った。ヴェレツィの前では、彼女はほとんど考える気にならなかったのだ。

激怒した魂はこの上なく残忍な復讐に燃えていた。彼女は道のない森林の中へさまよい歩いて行き、自分が人に見られていないことが分かっていたので、興奮した叫び声で激しい感情をぶちまけた

「ああ、ユリア！ 憎いユリア！ おまえへの憎悪を言葉で言い表すことができない。おまえはヴェレツィを破滅させた。あの人の心の中で楽しんでいるおまえの呪わしい姿は私の幸福を永遠に台無しにしてしまった。けれども、私は死ぬ前に復讐を味わうでしょう。——ああ！ すばらしい復讐を！」彼女は言葉を切った——自分が飲み込まれている情熱を思った。——「おそらく、負けず劣らず激しい者が私に

対抗するようにユリアを仕向けたのでしょう」
彼女は言った。再びヴェレッツィの病気のことが——死ぬかもしれないという思いが——彼女の魂を激昂させた。哀れみは、復讐と挫かれた情熱によって追い払われ、消え去った。「おまえを可哀そうに思う、と私は言いましたか。憎らしいユリア、私の言葉は心の中の気持ちをずいぶん隠していました。いいえ——いいえ——おまえは私から逃れられない。——おまえを可哀そうに思う、などと！」

心に食い込む思いに再び浸って、彼女は時間を気に掛けなかった。やがて顔を上げると、夜の影が急速に大地を覆い始めているのが見えた。夕方は静かで澄みきっていた。夕方の西風に穏やかに揺すぶられて、高い松の木々がもの悲しく溜息をついた。はるか西には宵の明星が現れ、たそがれの中でのほかにきらめいた。その光景は厳かなくらい静かであったが、マチルダの魂とは調和していなかった。この上なく柔らかで、この上なくもの悲しい陰鬱な調べが南からの強い風に乗って漂って来たように思えた。マチルダは耳を澄ました——それは修道院の修道女たちが亡くなった人のためにミサを歌っていたのだった。

「おそらく天国に行ったのでしょうか！」自分との違いに心を打たれてその罪深い魂が震えた時、マチルダは叫んだ。一連の恐ろしい、拷問のような思いが彼女の魂に重くのし掛かった。そして、自分の感覚の鋭さに耐えきれず、彼女は急いで館に戻った。

このようにして、自分の飲み込まれている熱情がさまざまに激発する中で、マチルダは時を過ごした。彼女の頭は混乱し、心は計画の不首尾に乱れ、以前はとても軽く快活だった気分が今では希望が挫かれたことで意気消沈していた。

「次に何を計画しましょう」がマチルダの頭

の中の問いかけだった。「ああ！ 分らない」

彼女は突然ぎくっとした——ザストロツィのことを思ったのだ。

「ああ！ 今までザストロツィのことを忘れていました」新たな希望の光が魂に差し込んだ時、マチルダは叫んだ。「でも、彼は今ナポリにいるし、会えるまでには当然少し時間がかかるでしょう」

「ああ、ザストロツィ、ザストロツィ！ あなたがここにいたら！」

自分の決意を十分に整理すると、すぐに彼女はフェルディナンドを呼び出した。彼の忠誠に思い切って頼ることにし、急いでナポリに赴き、託されたザストロツィへの手紙を届けるよう命じた。

その間、ヴェレッツィの健康は、医者が予測したように、ラウレンティーニ館の温暖な気候と澄みきった空気のおかげでずいぶん回復した。それで、まだとても弱くてやつれていたけれども、天気もよく、夏の夕暮れは静かだったので、彼はマチルダに付き添われて近郊の風景の中を散策することができた。

聴罪司祭が時たま不定期に訪れるのを除いては、変化のない、規則正しいふたりの生活を乱すようなことは何も起こらなかった。このような陰気な孤独の中で、ヴェレッツィはマチルダにとってすべてであった——彼女は絶えず彼のことを思っていた。夜にはその姿が夢で、彼女の有頂天になった想像の中に現れた。彼の前にいる時を除いて、彼女は落ち着かなかった。そして、自分を飲み込んでいる情熱がせめぎ合う激発にかき乱されて、彼女の魂は錯乱した、気も狂わんばかりの愛で、言いようのない歓喜へと運ばれた。

彼女の音楽の好みは申し分なかった。声は最高に甘く、ハープから琴線に触れる調べをつむ

ぎ出す腕前は、心をうっとりさせせてもの悲しい喜びを与えた。

彼女の声の感動的な表情は、時折彼女の魂に訪れるやさしさによって豊かになり、聞き入るヴェレツィの耳を和ませて陶然とさせた。

それでもまた、彼女の誘惑的な甘言がかき立てた一時的な喜びから我に返ると、彼はユリアのことを思った。この世のものとは思えないその姿、遠慮がちな慎み深さ、気取りのないやさしさを思い出すと、ほんの束の間とはいえマチルダに関心を持つことを自らに許したことで、いっそう激しい、いっそう深い後悔と悲しみの疼きが彼の胸を襲った。

時間が、日々が、のろのろと過ぎていった。ふたりは夕方には館の周辺を歩いた——暗く、陰鬱な森が遠くまで延びていた——雲の帽子を被った山々がその巨大な頂上を高くもたげていた。また、泡立つ瀑布は突き出た岩の間から勢いよく飛び出すと、突然激しい流れとなって、下の谷間へと向かった。

この景色の中へ、狡猾なマチルダはいつも自分のえじきを案内した。

ある夕べ、月が山の巨大な輪郭線の上に昇り、遠くに見える瀑布を銀色に染めた頃、マチルダとヴェレツィは森林に行った。

少しの間、ふたりのどちらも話さなかった。激しい、抑えられた感情が胸の内を苦しめていることを物語るマチルダの溜息を除いて、静寂が続いた。

ふたりは黙って森林の中に入って行った。青い空は星で散りばめられていた——穏やかな空気を揺り動かす風は一陣もなかった——輝く天の凹面を覆い隠す雲は一つもなかった。ふたりはそびえ立つ森で一面覆われた高台に上がった。周囲の木々が円形競技場を形作っていた。下には、ゆるやかな上り坂によって、空き

地が森林の広大な広がりを見せていた。それは、向かい合う山の上にかかる月でぼんやりと見えた。向こうのゴツゴツとした高台は銀色に輝く月の光で縁取られて、はっきりと見えることがあるだろう。

ヴェレツィは芝土に体を投げ出した。

「何と美しい景色だろう、マチルダ！」彼は叫んだ。

「ほんとうに美しいです」マチルダが答えた。「私はいつもほれぼれと眺めていました。それで、自然の作り出したものをあなたが私と同じように考えるかどうかを知るために、今夜あなたをここに連れて来ました」

「ああ、私は熱烈にこれを賞賛します」ヴェレツィが叫んだ。彼は目の前の景色に心を奪われ、うっとり眺めた。

「二、三分失礼します」マチルダは言った。

ヴェレツィの返答を待たずに、彼女は急いで小さな木の茂みに入って行った。ヴェレツィは驚いて見つめた。間もなくとてもうっとりとするような旋律の響きが夕方のそよ風に乗って聞こえてきたので、ヴェレツィは孤独の霊のようなものが天上の音楽を人の耳に聞こえるようにしたのだと思った。

彼はなおも耳を澄ました——それは次第に弱まっていくようだった——それからまた、さらに大きな音の、もっと熱狂的な高まりが続いた。

その音楽は景色と調和していた——それはヴェレツィの魂と調和していた。それで、マチルダの策略の首尾は、この点では、彼女が確信している期待を越えていた。

彼はなおも耳を傾けた——音楽が止んだ——そしてマチルダの均整の取れた姿が森から現れ、ヴェレツィを幻想から呼び覚ました。

彼は彼女をじっと見つめた——その美しさ

と気品は彼の感覚に強烈な印象を与えた。彼女の感性に、自分を魅了するものを彼女が讃美することに、彼は嬉しくなった。また、彼女が賢明に音楽を手配したことで、彼の心に、彼女自身も同じ気持ちを経験しているのだから自分の心の感情を彼女は分かっている、と確信させた。

ここまでは何もかもマチルダが望む通りに進んだ。彼の感情に触れることは常に彼女の目的であった。彼の関心を引くことを、彼の憂鬱を晴らせるようなことを見つけられたら、あるいは、その心から他の姿をうまく消し去れたら、彼はすぐに、自発的に彼女を自分の胸に抱き締めるだろう、とマチルダは確信していた。

何事においても彼と一致するふりをする——愛の存在にはぜひとも必要であると彼が考えている心情の一致と考の調和があるふりをする——ことで、間もなく自分の目的を達成できる、と彼女は思っていた。

しかし共感と心情の一致は、激しい感情を静め、とろけるようなやさしさと魂を満たし、その邪魔をしないで絶えず魂を所有するような愛には必要であっても、マチルダの血管の端々にまで流れている、抑えきれない激烈な熱情とはまったく調和しなかった。

自分の愛する人との交わりを楽しんでいる時、彼女の魂が静かな喜び、かき乱されない平静さに満たされることはなかった。いや——そうではなく、彼以外のことには一切無頓着で、自分が彼に近づくことでさえ、抑制できないくらい感情で彼女をかき乱した。

彼の顔を見つめている間、彼女の脈はいつにない激しさで打ち、胸がどきどきし、自分自身では意識せずに、熱い、艶かしい火が目から放たれた。

その情熱もまた、ヴェレツィの前では抑制されていたけれども、次第に激しさを増して魂

をかき乱した。孤独によって育まれ、他の魂なら可能であるかもしれない程度を越えてしまい、その情熱は時に彼女を狂わせそうになった。

それでも、自分自身の自制に驚きながらも、その必要性を強く自覚しているので、二度とヴェレツィに自分の情熱について話さなかった。

第十一章

ついにフェルディナンドの帰還をマチルダが待ち望む日がやって来た。時間をたがえずフェルディナンドは戻ると、マチルダに、ザストロツィはさしあたりここから遠くない田舎家に居を構えている、彼はそこで彼女がやって来るのを待っている、と告げた。

マチルダは、ザストロツィが彼女の館よりも田舎家の方を選んだことにとても驚いたが、それを心から消し去って、急いで彼に会う支度をした。

彼女は間もなく田舎家に到着した。ザストロツィが彼女を出迎えた——彼は足早に彼女の方に近づいた。

「それで、ザストロツィ」マチルダは問いかけるように叫んだ。

「ああ」ザストロツィが言った。「私たちの計画はすべて、これまでのところ、うまくいっていません。ユリアはまだ生きていて、富と権力に取り囲まれていまだ私たちの復讐を撥ねつけています。私は彼女の破滅を計画していましたが、その時あなたの命を受けて、ここにやって来ました」

「ああ！」マチルダが叫んだ。「私はずっとこうなるに違いないと心配しています。けれども、ザストロツィ、私はあなたの助言を——あなたの助力をとっても必要としています。長らく

私は望みのない愛につらい思いをしています。しばしば私は期待していました。そしてその分、私の熱い期待は失望によって挫かれました。

それ以上言うことができずに言葉を切った時、いらだちの深い溜息がマチルダの胸から吹き出した。

「あの男が直ちにあなたのものになるのを妨げているのは」ザストロツィが答えた。「あの男の胸の中で楽しんでいるあの呪わしいユリアの幻影に過ぎません。あなたがただそれを消し去ることができたらいいのに！」

「それを消し去ることができたらいいのに、と思います」マチルダが言った「私たちの間に今ある友情はすぐに愛へと実っていくでしょうし、私は永遠に幸福になるはずです。ザストロツィ、どうしたらそれができますか？ でも、私たちが幸福について考える前に、私たちの身の安全を心配しないといけません。私たちはユリア破滅させなければなりません。あの女はあらゆる手段を使って、いまだにヴェレッツィの運命の成り行きを知ろうとしています。でも、彼女はあのように富と権力に取り囲まれています。どうしたらそれができますか？ ナポリの刺客の誰もあえてあの女の命を狙おうとはしません。報酬がどんなに大きくても、自暴自棄の極みにいる男にあの女を即座に殺す気にならせることはできません。また、仮に私たちがそれを試みるとしても、宗教裁判所の最も恐ろしい拷問、不名誉な死、それでいて私たちの願望は達成されない、というのが結果でしょう」

「そのように考えてはいけません、マチルダ」ザストロツィが答えた。「ユリアが富を持っているからといって、私のように復讐を熱望している者の剣で襲われることがないとか、ナポリで豪勢に暮らしているからといって、あなたの手で、挫かれたライヴェルの手で用意された

毒杯が彼女を悶え、痙攣させながら墓へ送り込むことができない、などと考えるはいけません。いやいや、彼女は死にます。しかも私たちは拷問台で悶えることはないでしょう」

「ああ！」マチルダが遮った。たとえ宗教裁判所の牢獄で悶えながら、この上なく苦しい拷問を受けても、私はかまいません。たとえ民衆の目にさらされて最も屈辱的で不名誉な死を遂げても、私はかまいません。もしも死ぬ前に——もしもこの霊が別の世を求める前に、計画した目標に達し、言葉で言い表せない、いまだ考えられないような幸福を楽しめるなら」

その間に夕方が近づいて来た。時刻が遅くなっていることに気がついて、マチルダとザストロツィは別れた。

風は涼しくて強く、むしろ嵐のようだった。軽やかに流れゆく雲は濃青色の空を横様に勢いよく追い立てられていた。銀色の月は威厳を持って東の天高くに掛かり、影のような雲を天の霊のように透明にしていた。それは時に月の軌道を横切り、遠くの暗い空に幻影のように次第に消えていった。この光景をマチルダは眺めた——自分の犯罪、過去の人生が列をなして恐怖に打たれた彼女の想像に立ち上ってきた。今なお燃えている愛が、抑制できず克服できない情熱が、血管の中で暴れ回っていた。

罪深い欲望で有頂天になっている彼女の五感には、期待される喜び——混乱した懸念と混じり合った喜び——で言い表せないほどの歓喜に浸って、渦巻いていた。

このようにして、きらめく天の凹面をまるで凝視しているかのように、彼女は腕を組んで立っていた。

遅い時刻だった——いつも戻る時間よりも遅かった。それでヴェレッツィはマチルダを出迎えるために外に出ていた。

「おや！ 深く考え込んでいるのですか、マチルダ？」ヴェレツィが冗談めかして言った。

マチルダの頬は彼がこのような話す間一瞬真紅に染まった。しかしながらそれはすぐに消え去り、彼女は答えた。「夕方の静穏を、日没の美しさを楽しんでいたのです。その後、心地よいそがれに誘われていつもより遠くまで散策しました」

疑うことを知らないヴェレツィは、マチルダの態度に何ら変わった点を見なかった。しかし、夜風が冷たいことに気付くと、彼女を館の中に導いた。マチルダの方では、自分のえじきを確保するために、あらゆる手管を試し、あらゆる甘言を用いた。彼が好むものをすべて彼女は賞賛するふりをした。ヴェレツィが口にするあらゆる意見は、いつも油断のないマチルダが先に言った。しかし、長い間、すべては無駄であった——長い間、彼の愛を手に入れようとするあらゆる努力は無益であった。

しばしば彼女が天的とも言える体をハーブの上に傾けてそれに触れ、その弦から惚れ惚れするような音を引き出す時、ヴェレツィはうっとりとして見つめ、他のことはすべて忘れて、喜びの忘却に身を委ねながら夢うつて耳を傾けた。

しかし彼女のいかなる手管も彼の思い出からユリアを引き離すことはできなかった。彼はマチルダに対してずいぶんやさしくなった。彼は尊敬を、この上なくやさしい尊敬を抱いた——しかしそれでも愛することはなかった。

このようにして時が過ぎた。——しばしば絶望が、またヴェレツィが決して自分を愛することはないのであるという考えが、この上ない激しい苦悶でマチルダをかき乱した。館を取り巻く自然の美しい景色はもはや関心を引く力がなかった。溢れ出る思いに我を忘れてしばしば

自分の部屋に一人でいる時、彼女の心は先を予想する空想の翼に乗って浮遊した。時には想像が恐ろしい未来図を描き出した。ヴェレツィが自分を嫌う、自分を完全に捨てるかも知れない、ユリアと結ばれるかも知れない。これらが彼女の頭に押し寄せ、彼女を狂気に追いやりそうになった。というのも、思いはヴェレツィのことだけだったから。休むことのない空想に育まれ、この上なく恐ろしい予想が花咲くマチルダを枯らした。——しかしながら、時には分別の輝きが彼女の魂を貫いた。想像上の至福の幻想に欺かれて、すぐに光を引っ込めてしまう光線から彼女は新たな勇気と生き生きとした喜びの予感を得た。というのも、たいていは憂鬱に沈んで、彼女の落胆した目は地面をじっと見ていたから。時には燃えるような表情が、欲望が満たされる予感にあおられて、その火のような眼窩から放たれたけれども。

このようにせめぎ合う感情にかき乱されて心が揺れ、その狙いを自覚しないで、遂行すべき最も望ましい計画が分からない時には、彼女はよくザストロツィを求めた。なぜか分からないで彼女は彼に大いに頼った——彼の言葉は冷静な熟考と経験の言葉だった。そしてその詭弁は、私たちの行動を統制できる超越者など存在しないことを彼女に確信させる一方で、彼女の心に平安をもたらした——その平安の後に来るのは、彼女の協力者の議論は偽りだという恐ろしい、抗しがたい確信！ しかしながら、それでもなおそれは彼女の気持ちを静めた。そして彼女の理性と情熱に同時に語りかけて、彼女がどちらかの恩恵を受ける力を奪った。

その間、ヴェレツィの健康はゆっくりと快方に向かっていった。しかしながら、以前に経験した凶暴な試練によって乱された精神は活力を回復せず、時とともに、当初は激しく抵抗で

きなかった悲しみが今では憂鬱となって定着していた。それは彼の顔一面に広がり、あらゆる行動にはっきりと表れていた。そして、抵抗にあってマチルダの情熱に火が付き、怒りは十倍になった。

心に触れるヴェレッツィの声のやさしさ、その意気消沈した目の和らいだ表情が、ひどく乱れてはいるがいっそう穏やかな感情で彼女の魂に触れた。彼の前では彼女は落ち着いた気分だった。そして一人でいる時には耐えがたいほどの激しい情熱も、彼という時には和らいで、混乱してはいるがやさしいが喜びになった。

ある夕方のことだった。マチルダとザストロツィには先約がなかったので、挫かれた情熱に負けてマチルダは森林へと向かった。

空はいつになく薄暗く、太陽は西の山の下にすでに沈んでいた。そして、その消えゆく光線が分厚い雲を赤いぎらぎらとした輝きで染めていた。——一陣の風が立ち起こってそびえ立

つ松の木々の中を吹き過ぎる時に溜息のような音をたてた。それらの木々はマチルダの頭上高く立っていた。木立の中のつぶやきのようにかすれた遠雷は、不明瞭なこだまとなって虚ろな微風と混じり合った。マチルダが嵐を気にも留めず道のない森林に沿って進んでいく時、明るく輝く稲妻が彼女の行く小道で絶え間なく閃いた。

ゴロゴロという雷は今や頭上で狂ったように音を立て、稲妻がいっそう大きな曲線を閃かし、頻繁な嵐によって枯らされて上の高台でその裸の頭をもたげている傷ついたカラマツを周囲の薄闇の中に時折見せた。

マチルダは突き出た花崗岩のかけらの上に腰を下ろし、周囲で暴れている嵐をじっと見つめた。鳴り響く雷鳴の中で時々生じる前兆、さらに激しい嵐の前兆となる静けさは、マチルダの心一面に広がる静穏——さらに激しい情熱の激発の前の静穏——に似ていた。